

小池文英先生の追悼

津 山 直 一

小池文英先生には昨年秋より病まれた左側頸部扁平上皮癌のため7月24日朝、東大病院内科病棟に於て逝去67歳の生涯を閉じられた。我々はリハビリテーション界の先達であり、良きリーダーの一人を失わねばならなかった。先生は昭和14年東大医学部をご卒業後故高木憲次先生の下で整形外科をご修業、昭和17年5月高木憲次先生が畢世の仕事とされた肢体不自由児の療育のための東京整肢療護園を創設された当初より勤務され半生を捧げられた。昭和19年には陸軍軍医として応召トラック島に赴かれたが途中先生の乗られた輸送船は敵機の空襲にあり、撃沈され太平洋の波浪の中に泳がれること数刻、辛うじて味方駆逐艦に救い上げられたとの事である。ある時先生はその話しをされ、駆逐艦の低いと思った舷側の縄梯子をよじ登るのが如何に長く感じられたか、また敵の襲来のため尚洋上に泳いでいる戦友を見捨てて去らねばならなかった時の心苦しさを語られたことがあった。トラック島でも空襲と戦後処理の苦労の2年間を過され昭和21年2月帰国されたが、お留守中に度重なる空襲のため療護園は創立わずか3年で灰燼に帰してしまっていた。

しかし先生は高木園長と共に療育の灯を消すことなく、療護園の孤塁を守り必ずもとの施設以上のものを復興しようと志を共にされ、事実焼け消えた療護園を再建、日本における肢体不自由児療育活動の中心的存在にされたのであった。

私は医師になった昭和22年秋よりしばらく焼け跡にただ一つ残った平屋木造の看護婦寮を利用して活動を開始していた療護園に勤務、先生と共に働いたが、物資、食糧、人手すべて窮乏の極で、先生のご家族すら焼け跡のガレージを改修して住まわれ、職員の方々も工場の跡などに住居を作られる有様であり、手術場は普通の居間の畳を除いた板の間で床の間がついている状態であった。焼け跡から牽引道具や重錘の焼け残りを拾い集めて使ったこともあった。しかし人々にはまじめさと団結があり、その中心が小池先生であられた。先生は英会話がお上手で厚生省にご兼務になられマッカーサー司令部との折衝に当られたが、どれ位先生のお蔭で当方の意志を

GHQに通すことができたかわからない。昭和25年から26年にかけて水野祥太郎先生（欧州）らと同時期に国連のフェローとして渡米され戦後のリハビリテーションの現状を学ばれた。少くとも私にとってはリハビリテーションなる概念を体系だったものとして教わったのは帰国されたこの両先生からであった。その後このたび御逝去になられるまで整肢療護園園長（心身障害児総合医療療育センター長）、全国肢体不自由児施設運営協議会長、日本肢体不自由児協会常務理事、日本障害者リハビリテーション協会常務理事、Rehabilitation Internationalの日本代表、第5回日本リハビリテーション医学会会長、その後常任理事をつとめられ、また厚生省はじめ多くの審議会委員として肢体不自由児・者のための諸立法、諸施策のため不断の努力をつづけられた。先生は謙虚な方で常に自分を目立たせようとされず、しかも地味な勞をいとわれない真に「勞してほこらず」のご生涯を貫かれた。野球、庭球には群を抜いて巧みなスポーツマンでもあられたが、先生が自己を語り誇られることは稀であった。

このことは故高木憲次先生との終生変ることのない美しい師弟の情と共に先生を知る人は想い出に残すにちがいないであろう。今回の病いのため昨年秋より東大病院に3回の入院をくりかえされたがそのたびにご病状が悪化し、最後の数週は真にお顔を見るのが辛かった。しかし決して不満や苦痛を訴えられることはなく、ご自分の最後を淡々と受けとめておられるように見えた。何とかいい残したいと思われたのか病室に行くたびに私に一生懸命話しかけられた。しかし手術による反回神経（と顔面神経）麻痺、放射線照射による唾液分泌不足、咽喉頭炎のためほとんど声にならず聞きとれなかった。最後にいわれた言葉のうちやっと私が聞き取ったのは「療護園」「C.P.」の2つの言葉であった。何をいおうとされたのか真に心残りである。

ある日病室に行くと優しいような老齢の婦人が先生の顔をふいておられた「母に会いたいと申しますので、松本から88歳の母が参ったのです」と奥様がいわれた。私は最後にお母様を恋われる先生を見て熱いものを感じ部屋

を出るほかなかった。

昭和22年以来35年を越える年月ご指導をいただき、ご交際を賜ったが、後輩に対しても常に遠慮深げな丁寧な言葉づかいを変えられることは決してなかった。近年の肢体不自由児施設は運営が容易でなく、園長の先生が各方面に頭を下げて患児の紹介を依頼して回られる姿はお

気の毒であった。しかし先生は「国立民営の方々はまだまだご苦勞されています」とだけいわれた。真にご人格者であった。目立たないで尽されただけにご逝去のあと人々は残された空白の大きさを改めて感じるであろう。御遺族のご多幸と先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(東京大学教授、整形外科)